

書 評

浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭編：
『オーストリアの風景』ナカニシヤ出版，2015年
7月刊，188p，2,200円（税別）

2005年1月，76歳で亡くなられた元京都大学名誉教授の浮田典良さんが『スイスの風景』（ナカニシヤ出版，1999年）の姉妹編として意図していたものである。先生が亡なられて，弟子の藤塚氏が先生のワープロに残されていた遺稿に，不足部分を加賀美・呉羽両氏の助力を得て完成したものである。

本書はI部でオーストリアの概観14章，II部で取り上げた市町村71章からなっている。各章は見開き2頁からなり，4枚ほどのカラー写真が挿入されていて，楽しく，また読みやすい。I部でユニークな章は，「ホテルと民宿」・「カフェ」・「料理」・「ビールとワイン」などである。ウィーンのカフェは筑波大学大学院地域研究研究科修士論文のテーマになるほど文化となっている。II部はオーストリアの9州から，各州4～11の観光地としてふさわしい市町村を取り上げて解説してある。州の最初の頁には半頁の州の地図が載せてあって，観光地の位置関係を知らせてくれる。

学術書としてはMartonne, E. (1926) : *Les Alpes, Paris* や，バイブルとなっている Krebs, N. (1961) : *Die Ostalpen und das heutige Österreich*, 2 Bde., 3. Aufl. Darmstadtがある。東大名誉教授 坂口 豊 (1973) : 『ウィーンと東アルプス』(古今書院)のネーミングはKrebsにあやかっただけのもの。G. グラウエルト 佐々木博・石井英也・桜井明久訳 (1980) : 『アルプス—自然と文化—』(二宮書店)もある。

市販の観光ガイドブックとの違いは，取り上げ

ている観光地が小さな場所であり，地理的に意味のある場所を取り上げており，記述に執筆者の個性が感じられる。II部71章にはローカルな地図とホテルは掲載されていないので，本書を持って現地をすぐに歩けるわけではないが，高度な旅行計画を立てる際のルートや地域選定には役に立つ。

本書は「オーストリアの写真観光地誌」であり，浮田先生執筆の章は「オーストリアの写真旅行記」ともいえ，浮田先生流のホテル代などの記述があるが，1シリングが何円なのかを記してくれると安いか，高いかの判断が出来る。

1963年，フライブルク大学夏学期の上級ゼミナール「オーストリア」で15回，学生の発表を聴いた。自然・鉱工業・農業・首都ヴィーン・観光などの項目で，学生の発表レジュメに対して教授が〇〇の論文を読んでいない，などと指摘されていた。テーマの展開は学生の自由で，テーマを貰うとその勉強に図書館詰めとなっていた。夏季休暇に入ると，バスで「18日間のオーストリア巡検」。毎日の教授の説明などを交替で学生が記録Protokollして，巡検後全員がそれを保持する。

猛暑の日本の夏を避けて東アルプスの国で過ごす計画を立てる際に，是非読んでいただきたい。

(佐々木 博)

橋本雄一編：『QGISの基本と防災活用』古今書院，2015年10月刊，192p.，2,700円（税別）

私のような一介の高等学校の地理の教員にとって，このような書評をさせていただくことは身に余る重責であり，恐縮の至りである。が，次期学習指導要領にての高等学校地理必修という中で，この書はその“追い風”として大いに期待できる

内容である。役不足ではあるが地理教育の視点から、ということで、お許し願いたい。

「防災」は現代社会における喫緊の課題であり、高校の地理教育における重要なキーワードである。また、「GIS」も応用性に富んだツールであり考え方であり、高校の地理教育における重要なキーワードである。前者は高校地理教育の内容知の一つであり、後者は高校地理教育の方法知の一つであるといえよう。現行の学習指導要領においても両者は十分に記述されているが、今回の学習指導要領では必修科目として、さらに文理融合科目として内容知「防災」と方法知「GIS」はまさに両輪といえよう。つまり本書のタイトルは高等学校の地理教育における重要な“知”なのである。

編著者の前著「GISと地理空間情報－ArcGIS10とダウンロードデータの活用」(以下、「前著」)は、増補版、3訂版とIT、GIS情勢の変化に迅速に対応され、増刷の機会の度に内容の改訂を重ねてのベストセラーとなり、GISを学び活用するためのバイブルといえるような存在となっている。本書は前著の姉妹編とも呼ぶことができる内容である。前著は、GISソフトウェアの中で世界標準といえるArcGISを利用したものであるが、本書はフリーのGISソフトウェアの代表であるQGISを使ったものである。フリーのソフトウェアでも同様のことができることを示したという点が重要である。誰でもその気になれば、この知識を得ることが可能ということだ。

本書は一見、ソフトウェアの操作方法のマニュアル的に見えるが、そこには“知”がたっぷり含まれている。その、“知”であるが、本書は複数の内容についてのストーリー性を持って記述されている。つまり(1)ソフトウェアの操作マニュアル(インストールから具体的な操作方法)(2)GISデータの利用・作成方法(データのダウンロードからソフトウェアでの扱い方法など)

(3)地図学的考え方(測地、地図の論理など)(4)GISの考え方(地図化・可視化、空間分析・考察など)(5)地理学として利用(現実場面への適応など)といったストーリーが、それぞれがバランスよく、易～難、基礎基本～応用といった順序性を持っている。それぞれの教科書としても成り立つような充実した内容を持ちつつ、全てをいっぺんに学習することができるという、欲張り者にも十二分に満足できるという構成なのである。これは前著も同様であり、何よりも素晴らしい。ただ、(1)や(2)については、コンピュータの基礎基本を知らなければならないし、(2)や(4)については、GISについての多少の見識は必要だ。(3)や(5)はそれぞれの学問分野についての基礎基本は知らねばならない。本書ではこれらの知識の合体によって現代社会の課題への明快な一つの道筋を示している。

では、本書の内容を少し詳しく見てみよう。まず「第I部 基礎概念の説明」では地理空間情報とGIS、測地系と座標系について述べている。測地系と座標系については、GISを利用する以前では、一部の測量関係者など地図製作を生業とする者以外にとっては、あまり関心のない知識であった。しかし、GISの時代になると一変する。この知識は不可欠なものとなる。次の「第II部 地理空間情報の入手と地図化」では、無料ダウンロードデータの扱いである。地理空間情報活用法のもとで、出所が明確であり、安心して使えるデータとその利用方法が網羅されている。基盤地図情報(国土地理院)、国勢調査(総務省)、国土数値情報(国土交通省国土政策局)は3大ダウンロードデータと言っても過言ではないだろう。自作データについては、東京大学空間情報科学センターの提供のアドレスマッチングサービスによってGISデータ化する方法がしめされている。ここでは、こうしたデータの地図化(=可視化)が中心であ

る。適切な座標系の設定など、第Ⅰ部での基礎知識が実際の場面で適用される他、使用したデータにふさわしい適切な地図が作成できるように導かれている。そして、「第Ⅲ部 QGISの分析技法」は、最も“GISらしい”部分であり、前半のハイライトと言えるべき部分でもあろう。座標変換は必須の知識、空間データ結合、バッファにポロノイ、地図データと属性データの結合、検索、オーバーレイは空間分析の基本的な技法であり、これを習得することで、GISの効果・有効性をたいいていの場合で論じることができよう。

ここまでが前著と同じ構成である。つまり、この部分はGISを学ぶにあたっての必須の知識といえよう。前著はサブタイトルにもあるようにGISソフトウェア(ArcGIS)の操作とダウンロードデータの活用に主眼が置かれており、現実社会での適用は十分になされているものの、あくまでもそれは「例」としてとどめられていた。これに対して本書は前著の構成を継承しつつも「防災」という具体的な実際場面での確固たる応用もタイトルとして掲げているわけであって、ここから防災に有効な空間分析方法の実際面への適用を前面に押し出していく。「第Ⅳ部 QGISの防災活用」では、第Ⅲ部までの技法を駆使していくのであるが、まずは、標高と人口というそれぞれ自然的データ、人文社会的データの代表的なものを扱う。“活用”ではあるが、まずは、基本的なデータから入るので、広く汎用性に富む内容である。次の「第Ⅴ部 GISによる防災の分析事例」では実際の分析事例である。平面ポロノイに代わってネットワークポロノイを取り上げることによって、より実用的な分析となる。また、GPSデータの利用も示され、フィールドワークによるデータ収集についても言及されている。ここでも応用面を強調しつつも、GPSという基礎になる内容を含んでいる。最後に「第Ⅵ部 GISの防災活用に関

する検証」ではさらに検証を行うことによって、分析・活用に対しての有効性の吟味を行う。このように本書全体において常に易～難、基礎～応用と“学習”を意識した内容構成となっている。

さて、教育的な見地から、本書によって期待できる内容として具体的に以下の3点について述べさせていただく。まずは、地図全般についてである。GISソフトウェアをクリックしていけば、膨大な空間データであっても我々が見ることが出来る形になる。しかしそこには、目的があり、その目的にしたがった適切な作業が重要になる。その作業の一つには我々の見える形である地図の作成がある。地図を作成することはかなり高度な知的作業である。例えば、地図化ではコンター、バッファ、ポロノイといった現地では見えない線を引く作業もある。地図化をコンピュータで行うこと、決してたやすいことではない。そして、そこには地図学によってもたらされた地図のロジックに基づいた考え方が不可欠である。地図は画面であろうが、紙面であろうが、その基本原理は変わらない。しかし、地図学によってもたらされた成果がGISに反映されているとは必ずしも言い難い。正しい情報を伝えるためには、地図学の知識を十分に駆使する必要がある。いい加減に地図が使われてしまうことは、やはり“知”とはいえない。あやまった情報を受け手に伝えてしまうことになる。教育を念頭に置く場合、この“地図のきまり”の部分は重要である。この“地図のきまり”の中で、GISの時代になって特に重要視する部分は座標系・測地系と図法、そして、統計地図の作成技法である。これは本書の全体に関係する「地図化」にかかわる。特に、測地系・座標系と図法については本書の第Ⅰ部から第Ⅱ部にて重点的に扱われている。従来、GISの時代以前であると、これらの知識があっても実際の地図作成などへの活用に際しては、非現実的であった。従前の学習

指導要領では「図法には深入りをしないこと」などと明示されたこともあった。適切な分析のためには、座標系、測地系や図法をいかにして設定、選択するかは重要な部分である。これらはGISの時代では必須の知識である。また、統計地図についてもデータに応じて、コロプレスマップや図形表現図などの選択や、それらにおける階級区分や図形のサイズの設定など適切な表現方法がなされることが不可欠である。本書においては読者はこうした“地図のきまり”を“自動的”に学習できるような流れに乗ることができる。

次に地形図についてである。大縮尺地図についての学習はいままでは地形図にすべて頼っていたといえよう。つまり「地形図を教える」ということでほぼすべての学習がなされていた。地形図の学習では問題点も少なからず存在していた。地形図のモノクロコピーにて、等高線から尾根や沢を読み取る学習などがされていた。しかし、GISの時代では教授側は教えたい内容に見合った地図を教授側が提供するようになる。地形図を使って教えていた各種内容それぞれを教えるにふさわしい地図にして教えることが可能となり、教育的な効果がより一層期待できるようになる。本書の中では特に第Ⅱ部～第Ⅳ部における部分がこれと関連している。

そして、最後にハザードマップ、である。標高データを使っての津波浸水地域の作成によって、等高線を学ぶことの意義が明確になる。また小学校学区のポロノイ図は生徒が身近に感じてきた疑問点（自分のうちから近い小学校に通えない、何故など？）についての議論のスタートになる。本書の第Ⅳ部～第Ⅵ部にあるように、これらが現実社会に対応しつつ作成手順が示されていることで、地図を学習することの重要性が示され、紙媒体として配布、提示のために大画面に投影、実際に生徒に作らせるなど、教育現場での学習の可能

性もおおいに拡がる。

地理を専門とする教員にとっては「GISがわかる」「GISができる」には第Ⅲ部までが一つの目安であり、ぜひほしい知識である。例えば、大学での地理教員養成課程では、ここまでの内容の扱いがなされたい。そうすれば、教員になった後に、高等学校地理学習の中でのGISに関わる事柄に対しては十分であろう。GISについて教えたり、必要に応じて自ら教材を作成したり、さらにどのような活用するかにおいて十分であるはずだ。

生徒がGISソフトウェアを操作しての授業はアクティブラーニングという観点からも有効である。しかし、本書の内容のレベルの授業は高等学校では40人の必修科目としての授業では難しいだろう。上級学年での選択科目として開設されているような少人数の地理の授業などがふさわしいと思われる。いくら操作が簡便だといってもGISソフトウェアだといっても、これらの原理を生徒に理解させて使わせるのは簡単ではない。また、フリーのソフトウェアだからといって、ネットワークが構築され環境復元ソフトなどによってシステム化されている高等学校のコンピュータ室のPCにインストールするのめたやすくわけではない。システムに組み込むためには、それなりの手順（担当者、管理職、県教委などの了解と担当SEによる作業）が必要だ。いずれにしても、GISはまず教員が理解し習熟することが不可欠である。

最後になるが、本書を作るにあたって、どのように教育的な配慮に満ちた緻密な構成を創り上げるには、どれだけのエネルギーを注がれたのであろうか。評者のような凡庸な者にとっては想像し難いものである。そんな貴重な“知の蓄積”である本書を利用させていただくことができる読者としては、本当に頭が下がる思いである。教育現場で地理に携わる者にとって、本書からとてつもの

い大きな力を得た気分である。感謝の気持ちを込めて、さらなる精進をし、地理教育の振興のために邁進していくことを改めて誓いたい。

(小林岳人)

文 献

橋本雄一編 (2014) : 『GISと地理情報空間 ArcGIS10.2とダウンロードデータの活用』古今書院, 176p.

田林 明編著 : 『地域振興としての農村空間の商品化』農林統計出版, 2015年2月刊, 361p., 5,000円 (税別)

本書は、農村・農業を永年にわたって研究してきた編著者を中心とする計13人の著者による、農村空間の商品化に関する実証研究の成果である。編著者は現代日本の農村の性格の変化を「農村空間の商品化」と捉えて研究を進め、前著(田林, 2013)をまとめた。これに続き編著者らは、余暇活動や観光を主とする農村空間の商品化が地域振興に果たす役割の解明を目的として研究を積み重ね、その結果をまとめたのが本書である。

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 序論：日本における農村空間の商品化
- 第2章 首都圏とその周辺における農村空間の商品化による観光振興の地域差
- 第3章 東京都練馬区の農業体験農園におけるルーラリティの商品化
- 第4章 東京都稲城市における農家直売所の経営特性と都市における「農」の役割
- 第5章 茨城県牛久市における農村景観の商品化
- 第6章 茨城県日立市における観光農園サポーター
- 第7章 茨城県那須地域における農村空間の商品化による観光発展の可能性

- 第8章 長野県千曲市森地区におけるあんずの栽培にみる農村空間の商品化
- 第9章 山形県朝日町におけるエコミュージアム活動による地域振興
- 第10章 観光からみた農村空間の商品化による地域振興－新潟県上越地域と富山県黒部川扇状地の比較－
- 第11章 茨城県北茨木市平潟町における水産資源を活用した観光地化
- 第12章 地域資源を活用した漁村地域の活性化－富山県黒部市生地地区の事例－
- 第13章 結論：地域振興のための農村空間の商品化

以下では各章の内容を簡単に紹介する。まず第1章(田林 明)は編著者らの既往の成果を総括するとともに本書の課題を示す。農村空間の商品化は農村が消費の対象としての性格を強めている過程として捉えられ、わが国で進行するそれは四つの類型(農産物の供給、レクリエーション・観光、農村居住、および農村の景観・環境の維持と社会・文化の評価を通じた生活の質の向上)に整理されるという。全国スケールのそれらの分布図が示され、空間的パターンが大都市の影響等から説明される。次に栃木県那須町と山形県朝日町にみられる農村空間の商品化を例に、地域資源を活用した地域振興の試みとしての農村空間の商品化が説明される。これらから著者は、農村空間の商品化が産業振興といった金銭面だけでなく、地域おこし・まちづくりといった精神的・文化的な面でも地域振興に貢献する可能性が高いとして、事例研究によってこの可能性を検討することが本書の課題であるとする。

第2章(田林 明・大石貴之)は農村空間の商品化による観光・レクリエーションの振興がどのような地域差を持って進められているのかを、首都圏とその周辺地域(甲信越・南東北)を対象と